

蟹川村の前より向羽黒岩崎の間の堤四〇間、一〇間の内外で水除出をこしらえ、東は一の堰より一四町余まで、飯寺街道まで一面普請したから、御加判の旨、その折はまかり出、見分するから、人足共格別精を出して全く成就させるように。」

このように、ようやく治水工事が緒についたのに、一〇年（一六七〇）、一一年（一六七一）とひきつづき大洪水に見舞われている。特に一一年は、蟹川・真渡（真綿）間の工事の最中の罹災で、治水工事が如何に難渋であつたかは、当時より既に生々しい記録として残されている。

五、天和元年（一六八一）より明治維新（一八六八）に至るまでの主な洪水

天和元年八月七日に大洪水のあつたことが家世実紀にみえているが、主に湯川と飯寺の土手一〇〇間が押切られ、大川の東岸に氾濫して、城下町の穢多町・材木町・新町・侍屋敷小路・川原町・片原町・柳原などが浸水したとある。大川西岸の北会津村の被害についてはふれていない。

元禄九年（一六九六）六月二十八日も湯川・大川が氾濫して、ところどころ欠け崩れが起つたとある。ただし「飯寺より一の堰までの間は損害がなかった」とあるが、ここの堤防は寛文八年（一六六八）に名技術家安田孫兵衛が普請した記録があるから、その治水効果があつたためと思われる。しかし翌々元禄十一年（一六九八）七月二十七日の洪水には、一の堰村より塚原村までの間、土手七カ所、五六二間が押破られたとあり、たえず見廻って修覆しないと、その洪水防禦は容易でなかつたこと、今に変わりはなかつたらしい。

享保七、八年（一七二二、三）の洪水は、増水位が二年ひきつづいて相当大で、これが山崎の峽隘で押えられ氾濫し、その水位は新宮馬場の中頃まで達し、田原・大木・大沢の諸水が浸して湖のようになったともあるか